

2022年5月1日 復活節第3主日礼拝

メッセージ「あなたは命を選びなさい」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 10章 7-18節

「あなたの目の前には、命に至る道と、死に至る道があります。あなたは命の方を選びなさい」。そんな言葉を聞くと、「そんなこと当たり前で、わざわざ言われるまでもない」と思われるかもしれません。戦乱が続くミャンマーやウクライナを始め、世界各地の紛争地域からの難民などは、まさに命を守るために、故郷を捨てて他国に亡命しようとする人々ですから、まさに「命を選ぶ」という言葉通りの行為だと言うことができます。

しかし、その一方ではこの世界には、人が人の命を奪う戦争があり、相手の人を単なる労働力や資源としてしか見なさず、その相手を利用し尽くし、搾取する経済格差があります。東京オリンピックのために、日本でも盛んに「SDGs (持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals))」という言葉が耳にされるようになりましたが、このような言葉が生まれてきた背景にあるのは、「このままでは、この地球は継続、持続していくことができない」、「現在は、皆が命に向かう道ではなく、死に向かう道を歩んでいる」という事実でした。だからこそ、持続不可能な開発、金と権力と暴力による搾取の構造を続けるのではなく、皆が命を選ぶことができる世界を目指していかなければならない、ということで「SDGs」という考え方が登場して来たのだと思います。

国の「発展」や、「経済成長」という言葉を聞くと、それらはさも善い物のように感じてしまいがちですが、内容を詳しく見ていくと、必ずしも善い物ばかりではなく、例えば自然環境にとってはむしろ害悪である場合も多くあります。木が育ち、森が出来るまでには多くの時間が必要ですが、その森を切り拓いたり、地下資源を採掘したりするには、それほど時間がかかりません。かつては豊かな森林が広がっていた場所が、現在は荒廃した原野、砂漠となってしまった所もあると聞きます。目先の利益、短期的な得のために、目の前にあるものを採り尽くし、利用し尽くすことで、確かに目に見える成果が感じられて、経済も発展したかのように見えるかもしれませんが、その代償として後に残されるのは、命に至る道ではなく、死に至る道なのではないでしょうか。

現代の資本主義経済体制の下、私たちはいつの間にか、どこに向かって走っているのかすらも分からなくなり、ただひたすら走り続けるように鞭を打たれている

馬車馬のように、なっているのではないのでしょうか。私たちの先にあるのは、命に至る道なのか、それとも死に至る道なのか。「命に通じる門は狭く、その道も狭い」「滅びに至る門は大きく、その道も広い」(マタイ 7:13-14)という聖書の言葉を借りるまでもなく、この世界の中では、よほど意識して方向を定め、常に向きを正していかない限り、命の道を選ぶことはできず、それこそ「SDGs」も達成していくことはできないのではないかと思っています。

今回の聖書の言葉は、イエス様が語られた「私は羊の門である」(ヨハネ 10:7)という言葉と、「私は良い羊飼いである」(11, 14)という言葉でした。特に「羊飼い」の方は、西洋の絵画にもよく描かれているモチーフですし、羊を助ける羊飼いとして子ども向けの絵本にもよく描かれているので、分かりやすいのではないかと思います。しかし、今から約 2000 年前のパレスチナにおいて、イエス様が「私は羊飼い」と語られた時、それは現代の酪農家のように、単なる職業になぞらえた自己紹介ではありませんでした。羊は乳と肉と毛と皮とを提供してくれる家畜で、パレスチナの人々にとっては欠かせない貴重な財産でした。そしてその羊たちを管理するためにも、「羊飼い」は必要でしたが、野に出て生き物の世話をするので、安息日の遵守など律法に定められている規定を彼らは守ることができず、また穢けがれていると考えられていた血に触れることもあり、当時の社会の中からは差別されていた職業でした。イエス様はそのような、社会の中で小さくされている存在であった羊飼いを例に出して、「私は羊飼い」と言われました。

さらに「羊飼い」には、命の危険もありました。財産である羊を狙って、強盗が来たり、狼や獣がやって来たりすることも、しばしばあったようです。そのような時、単に雇われているだけの人は羊たちを置き去りにして逃げてしまうが、本当の羊飼いは、羊たちを守るために命を懸けると言われています。このような譬えは、当時の人たちによく分かるものだったのだろうと想像します。「困難に遭うとすぐに逃げ出してしまう雇われ人たち」への批判、皮肉にもなっていますが、そのような人たちは、いつの時代でも、どこの国にもいるのでしょし、むしろそのような人たちが大多数なのかもしれません。

イエス様はまた「私は羊の門(出入口)である」とも言われました。羊たちの周りには、羊たちを強盗や獣たちから守る囲いがありました。そして羊たちはその囲いから、門を通過して外の牧草地へと出ていき、牧草を食べて命をつないでいきました……。ですから、この言葉を言い換えると、「私は命に通じる門である」とも言える

のだろうと思います。しかし、同時にそれは豪華できらびやかな大きな門ではなく、粗末で小さな門でもありました。日々羊たちが体をこすりつけて出入りするために、泥がついたり、毛がひっかかったりして、常に汚れているような、決して美しいとは言えないような羊の出入口。それが羊たちの命を守り、命を得させるための「羊の門」でした。

さて、私たちはどこに「命に通じる門」を見出しているのでしょうか。先にも紹介しましたが、聖書の中には「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道も広い。そして、そこから入る者は多い。命に通じる門は狭く、その道も細い。そして、それを見出す者は少ない」(マタイ7:13-14)という言葉もあります。社会の中で多くの人が、「価値がある」と考えているもの、例えば経済発展などは、実は命の方に向かっているのではなく、死の方に向かっているのではないか。その一方で、一見すると貧しく、不便で、面倒くさそうに見えることの中に、実は本当の命につながるものがあるのではないか。経済的には豊かになり、便利になっている生活の中で、生きているのに死んでいる。死んでいるかのように、日々疲れ切って生きている人が、たくさんいるのではないのでしょうか。私たち一人一人の命、たましいが、生き生きとして、輝ける時というのは、一体どういう時なのか……。

困難に遭遇した時に、羊たちを置き去りにして逃げ去ってしまった雇われ人たちは、その後をどんな気持ちで生きていくのでしょうか。羊たちを置き去りにしたことも、困難に遭遇したことも全て水に流して、無かったことにして、もしくは忘れて、その後の生活を送っていくのでしょうか。それとも主人に見つけ出されて責任を追究されないように、逃げて隠れて生活し続けていくのでしょうか。現代社会に生きている多くの人たちが、私自身も含めて、命ではなく死に向かって突き進んでいる資本主義経済体制の中で、そのような「逃げ出した雇われ人」「責任放棄した傍観者」になってしまっています。

イエス様は、「私が来たのは、みな^{あがな}が命を得るため、しかも豊かに得るためである」(10)とも言われています。イエス様が皆の「罪の贖い」となったというのは、私たちが死に向かう道から、命に向かう道へと買い戻された、引き戻されたということです。「あなたは命を選びなさい」ということ、言い換えれば「あなたは私と共に命に向かう道を歩むことが出来る」ということです。「良い羊飼い」であるイエス様が一匹一匹の羊のために命を懸けて、身を投げ出し、そして復活されたように、私たちもイエス様の後に従い、日々この命を使うことを通して、永遠の命、真実の命を生きるように、変えられていきたいと願っています。